書　評

微化石の科学
Microfossilis, second edition

H. A. アームストロング・M. D. ブレイジャー 著
Haward A. Armstrong, Martin D. Brasier
池谷仙之・鎮西清高 訳

朝倉書店，2007年6月25日発行，変形A4版，276pp.
ISBN978-4-254-16257-8，9500円（税別），

「微化石」は，顕微鏡機能の向上や抽出法の改良によって次々と発見され，その所属が明らかにされつつ，地層の堆積した年代の決定や，過去の地球環境を復元するのに使われてきた．また，微古生物そのものの進化や，一次生産者である微古生物が生態系の変遷のなかで果たしてきた役割なども解明されてきた．「微化石の科学」は，長い研究の過程で明らかにされたさまざまな微化石グループをほとんど網羅している．

訳者のまえがきに「地質学・古生物学についてひととおりの知識をもっている大学学部～大学院生向けの微古生物学の基礎的で網羅的な教科書」とある．この網羅的であることこそ，本書の最大の特徴であり，少し物足りない思いをするもとでもある．この網羅性から，本書は辞書と詳細な解説書の中間に位置するような使われ方をするものと思われる．

1980年にMartin D. Brasier氏によってMicrofossilsが出版された（George Allen & Unwin Ltd）．「微化石の科学」はHoward A. Armstrong氏とM. D. Brasier氏によるMicrofossilsの第二版（Blackwell Publishing Ltd, 2005）の邦訳である．評者は，所属不明の微化石が鏡下に現れたとき，最初にとりだして図版を一通り検索するのは初版Microfossilsであった．初版から第二版への改良点を訳者まえがきから引用すると「最近20年間の進歩めざましい生命の起源と初期生物に関する研究成果を大幅に取り入れ，各論に先立って微古生物学の総説と生物圏の出現を新たに50ページ追加している．各論も，2003年までの最新情報を加筆し，全体として初版より100ページも増えている」とある．本書は276ページからなり，訳者まえがき，日本語版への序，序につづいて，以下の総論2章，各論2章の，合計4章からなる．

I. 微古生物学の利用（31ページ）
II. 生物圏の出現（27ページ）
III. 有機質の殻をもつ微化石（51ページ）
VI. 無機質の殻をもつ微化石（137ページ）

「有機質の殻をもつ微化石」には，アクリタークとプラシノ藻，渦鞭毛藻とエブリア，キチノゾア，スコレコドント，胞子と花粉，の解説が含まれ，「無機質の殻をもつ微化石」では，石灰質ナノプランクトン（円石藻とディスコアスター），有孔虫，ラディオゾア（刺針類，濃彩類，放散虫類）とヘリオゾア，珪藻，珪質鞭毛藻と黄金藻類，繊毛虫（有鐘虫とカルピオネラ），介形虫，コノドントの解説がなされている．巻末には，付録：微化石の抽出法，図の出典，生物器官の名称・形態の呼称，生物分類名索引，事項索引が付け加えられている．これらのうち，図の出典，生物器官の名称・形態の呼称は訳者による追加である．

微化石の各論は，例えば有孔虫の章は，総論，現生有孔虫，生活環，殻，有孔虫の生態，浮遊性有孔虫の生態，分類（目，亜目単位での解説），有孔虫類の分子系統，有孔虫の歴史，有孔虫の利用，さらなる知識のために（文献の紹介），採集と研究のためのヒント，引用文献，のように構成されている．所属不明な化石の検索や，より詳細な解説の掲載された文献探索のための十分な情報が提供されている．さらに，各微化石の抽出法が巻末に簡潔にまとめられ，大変便利である．なお，本文中に囲み〈Box〉が設けられ，「安定同位体の測定」，「酸素同位体比に影響を与える表層過程」，「炭素同位体比に影響を与える表層過程」，「渦鞭毛藻の高次分類」などの12項目が解説されている．

訳者の序にも述べられているように，22種類の微化石を，2人の著者によって解説したことにより，解説の詳しさに微化石間のアンバランスが生じている．例えば，評者の専門である珪藻などは，もう少し詳しくない，と思う．一方で，著者の専門である有孔虫やコノドントの章は，挿図が多く，その解説は詳細である．

このアンバランスを考慮しても，研究室の本棚に1冊，院生室のどこかに1冊，中学校，高等学校の理科準備室や図書室に1冊，辞書のように備えられていれば，微化石研究の入口として，微化石をより深く理解するための手がかりとして，理科教育の教材として，極めてよい手引書になると確信する．

谷村好洋

骨から見る生物の進化

ジャン=バティスト・ド・パナフィユー著，
グザヴィエラ・バラル編，パトリック・グリ写真
小畠郁生監訳，吉田春美訳

河出書房新社，2008年2月29日発行，287pp.
ISBN4-309-25217-9，8800円（税別）

古生物学者が扱う化石には普通，色がない．微化石をSEM写真に撮ると，最近は説明のために着色することがあるが，やはり白黒の世界になる．それは，化石の情報の欠如のひとつと思っていたが，白黒の世界も驚くほど雄弁になると，本書は示してくれた．

開けた途端，どうしてこういう本を今まで誰も思いつかなかったのだろうと思った．基本的には白黒の動物骨格標本の写真集である．フランス国立自然史博物館など計6か所の博物館の貴重な収蔵標本から，約200点の現生脊椎動物を収録している．でも単なる写真集ではない．骨格標本は修復を施され，金属の結合部をはずされ，自在の形になっている．腕のいい写真家が撮影ポイントを慎重に選び，そして，コンピュータを使った修復を丁寧に行っている．

骨のウマにヒトが乗って駆けている．これは黙示録をイメージしたのか．オオサンショウウオの骨はショイヒツアーのホモ・ディルヴィイ・テスティスを思い出させる．アフリカゾウの顔正面はひとつ目の巨人キュクロプスを彷彿とさせ，イッカクの角はライプニッツの『プロトガイア』を思い起こし，パンダの“親指”の骨やカワアイサという鳥の歯はスティーブン・ジェイ・グールドを思い出させる．

美しい写真を見ていると，ついつい文章を読むのを忘れてしまうが，実は，本写真集は，フランスの自然史学界が粋を集めて放った現代の進化論の啓蒙書である．ダーウィン生誕200年，『種の起原』刊行150年を来年にひかえながら，世界は創造説の猛攻撃を受けている．今こそダーウィンが何をしようとしたのかをくっきりと見直さなければならない．

フランス国立自然史博物館名誉教授のジャン=ピエール・ガスクは「序言」でダーウィンの進化理論の基本を丁寧に述べている．著者ジャン=バティスト・ド・パナフィユーは「はじめに」で，進化とは生物が長い時間をかけて変化することであり，進化論の長い歴史をとき，21世紀の進化理論の地平まですばやく読者を到達させる．「進化論は，自然はいかなる計画も持たないと述べることによって，人間を特別な地位から引きずりおろしただけでなく，われわれの過去においてすでに未来が決められているという重圧から，われわれを解放した」と著者は結んでいる．

全体は6章よりなる．「第1章　体の構造」では生物の類縁関係を述べ，主に脊椎動物の分類の基本を述べている．骨格は動物の

奥深い構造をあらわす．そして，フランスはビュッフォン，キュヴィエ，ラマルク，ジョフロア・サン＝ティレールを生んだ国なのである．その自負がページの合間からもれいでてくる．

「第２章　種の誕生」では種分化の問題を取り扱っている．突然変異と自然選択，雑種，交雑，異所的種分化，拡散，共進化，大進化，ホメオティック遺伝子等の現代的理論が上質の写真の説明として登場する．それぞれの骨格標本たちは，身を守るすべは何もなく，骨だけでその理論を支えようとする．見事なものである．

「第３章　誘惑と淘汰」では性選択の問題を取り扱う．キリンの首もトナカイの角も性選択で説明し，逆にヒトは骨格ではあまり性差が見られないと説いている．

「第４章　進化の手直し」ではフランスの生物学者フランソワ・ジャコブの手直し論を展開している．最近の遺伝学・発生学の成果も披露される．スティーブン・ジェイ・グールドの活躍していた分野でもある．第４章と次の第５章は写真の豊富なところである．著者たちの伝えたいこと以上の迫力で骨格たちが自由に語っている．

「第５章　環境の力」では適応の由来を述べている．空へ海へさまざまな生物が適応していくのはいかなるメカニズムをとっていくのか．創造説ならば神の威力の一言ですまされるところ，だからこそ進化論の極意のところである．写真は骨が空を飛び，海を泳ぎ，とぐろを巻き，アリを食っている．骨にこんな迫力があったのだろうか．

「第６章　進化の時間」では地球の歴史を取り扱う．古生物学者の出番である．もちろん，キュヴィエとラマルクの争ったトキも，東アフリカのマラウィ湖のカワスズメも，カモノハシも，そして絶滅したフクロオオカミも登場する．最後は絶滅の問題で，人間に警告を発している．

もちろん，「分　類／脊椎動物の系統発生図／用語解説／参考文献／総索引／動物索引／標本所在地」が「付録」として最後に掲載されている．

フランス語で2007年10月に出版された後，英語版が2007年11月に出て，日本語版が2008年2月に出版された．どんな手品を使ったかわからないが，随分早い訳である．もう，現代はこういうことが可能になったのかもしれない．

矢島道子

リンネと博物学：自然誌科学の源流（増補改訂）

千葉県立中央博物館編著

文一総合出版，2008，東京，298pp.

ISBN978-4-8299-0129-8，15,000円（税別）

リンネ協会は世界中にあるが，最古のものはスウェーデンではなく，ロンドンに1788年に設立された．初代会長ジェームズ・エドワード・スミス卿が，リンネの未亡人サラ・リサから1784年にリンネ・コレクションを購入したからだ．リンネ・コレクションがスウェーデンを離れたとき，しまったと思ったスウェーデン政府が船で追いかけたが，イギリスは世界最強の海軍が率いた船で，とても追いつかなかったと言われている．これは，よくできた話で，史実とは思えないが，本書を手にして，この逸話を思い出した．日本も素晴らしいリンネ・コレクションを持っていると思った．

昨2007年は著書『自然の体系』で生物の二名法を確立したカール・フォン・リンネ（1707－1778）の生誕300年を記念して，世界中でさまざまな行事が行われた．千葉県立中央博物館は所蔵している『自然の体系』（Systema Naturae）初版をはじめ，多くのリンネ・コレクションを利用して特別展を開催した．そして本書は，2007年5月にロンドン・リンネ協会で基調講演をされた天皇陛下の講演全文を付して出版された．

植物の学名のつけ方は『自然の体系』初版から議論されていたが，動物の学名（二語名法）は1758年発行の『自然の体系』第10版から採用することが決められた．だから第10版のコピーはよくみかける．『自然の体系』初版（1735）を私は初めて見た．わずか12ページの本だが，54.7cm x 42cmの大判である．現在までに44部しか残っていないといわれている．初版の本物は千葉県立博物館所有のものが，アジアでひとつだけだそうである．12ページすべてのコピーと対訳が本書の第1部である．

『自然の体系』初版の対訳を丁寧に読むと，いろいろおもしろい事がわかってくる．リンネの時代にどんなものをfossilと考えていたかがわかる．私たちの考える化石は鉱物界ー発掘物綱(Fossilia)—石化物(Petrificata)に入っている．筆石，ウニ，貝，昆虫，魚，鳥などの化石の名が列挙されている．また，当時流行っていたドラゴン，バシリスク，ヒュドラ，一角獣などの存在を否定している．

第２部ではリンネ自身あるいは弟子たちの著作や関連資料など，千葉県立中央博物館が所蔵しているリンネのコレクションが解説されている．貝殻の図は美しい．アンモナイト，三葉虫，腕足類の化石，珪化木の図があるようだ．第３部では，美しい図版が並んでいる．第４部はリンネの業績についてのさまざまな視点からの論考も含まれている．14年前の千葉県立中央博物館での特別展図録『リンネと博物学：自然誌科学の源流』がベースになっている．

個人で気軽に買える本ではないが，研究室や図書館で購入するよう働きかける価値は十分にある．

最後に目次を挙げておく．

リンネ生誕300年記念行事天皇陛下基調ご講演
Linne and Taxonomy in Japan (Akihito) vii
リンネと日本の分類学（明仁）xv
１．リンネのしごと 1
自然の体系（初版）3
２．リンネのしごと 2
リンネの著作・関連文献 41
３．リンネコレクションから
リンネ：クリフォード庭園のバナナ 101
ミラー：リンネの性の体系 103
カーチス：リンネの体系による植物学 106
伊藤圭介：泰西本草名疏付録 108
バーブット：リンネによる昆虫の属 110
ズルツァー：リンネの体系中の昆虫の特徴 111
スパルマン：スウェーデン鳥類学 113
リンネ：クリフォード庭園誌 117
リンネ：ラップランド植物誌 155
フォシュスコール：東方旅行における稀な自然物図説 167
リンネと関係者のメダル 173
４．自然誌科学の源流，リンネ
最高のナチュラリスト，リンネ（木村陽二郎） 183
分類学の黎明期における生物分類と種概念（直海俊一郎）195
植物分類学の始祖としてのリンネと種名のタイプ（大場秀章）211
植物と動物の学名について（天野誠）217
リンネと医学（梶田昭）225
リンネと生態学（沼田眞）231
リンネと昆虫学（小西正泰）237
リンネと鳥類学（桑原和之・茂田良光）245
リンネと藻類学（宮田昌彦）247
リネーとロシアの博物学者（小原敬）257
リンネゆかりの旧クリフォート邸を訪ねる（大場秀章）263
ロンドン・リネアン・ソサエティー：その歴史と現状（大場秀章）269
ロンドン・リネアン・ソサエティー訪問記（林浩二）275
資料
リンネ関係年表（大場達之）280
リンネの学位・口述論文と『学問のたのしみ』（大場達之）283
索引 292

矢島道子

学術集会参加報告書

IGCP507「白亜紀におけるアジアの古気候」

第2回韓国シンポジウムの報告と第3回モンゴルシンポジウムの予告

IGCP（International Geoscience Programme）507「白亜紀におけるアジアの古気候」（リーダー ソウル国立大学 Yong Il Lee氏）の第2回国際シンポジウム“Paleoclimates in Asia during the Cretaceous and their global correlation”が2007年8月20日から25日の日程で，韓国ソウルにて開催された．このIGCP507は，前身であるIGCP350（リーダー 岡田博有氏，当時九州大学），IGCP434（リーダー 平野弘道氏，早稲田大学）を受けて，昨年発足した，白亜系を研究対象とする国際共同プロジェクトである．今回は昨年フィリピンにて開催された第1回シンポジウムに引き続き，リーダーであるLee氏の所属するソウル国立大学で催された．本シンポジウムには，日本から共同リーダーである坂井卓氏（九州大学）や前身のIGCP434のリーダーであった平野氏をはじめとする11名が参加した．その他，開催国の韓国17名，中国4名，モンゴル2名，インドネシア2名，スイス・ロシア・フィリピン・ベトナム各1名の，合計9カ国41名が参加した（図1）．参加が予定されていたインドやパキスタンの代表は，残念ながらビザが下りず直前のキャンセルとなった．

図1．第2回シンポジウム参加者の集合写真．ソウル国立大学・地球環境科学部前にて．

図2．シンポジウムの会場となったソウル国立大学地球環境科学部の国際会議場と，開会挨拶をするIGCP507プロジェクトリーダーのYong Il Lee氏（右奥）．

シンポジウム

8月20日と21日の2日間に渡って行われたシンポジウムは，ソウル国立大学地球環境科学部の国際会議場で催された（図2）．開催式はLee氏の挨拶から始まり，招待講演者であるWeissert氏による講演に続いて，6つのセッション（古生物・古生態，古気候，古環境・層序Ⅰ，テクトニクス，古環境・層序Ⅱ，イベント史）において，合計28件の口頭発表が行われ，盛んな討論が交わされた．中でも，Weissert氏，平野氏，浦本氏（千葉大），柿崎氏（広島大）と，炭素同位体層序による国際対比及び古海洋環境復元の発表がなされ，非常に活発な議論が行われた事が印象的であった．IGCP434プロジェクト時から続く炭素同位体比曲線を用いたアジア陸成層—海成層の広域対比が，このように実を結んできており，今後もアジア各地の時代未定セクションの年代対比研究を進めていくという，各参加者の共通課題を再確認できた事は，今回のシンポジウムの大きな成果の一つと言えるだろう．ただ，本プロジェクトの主題である「白亜紀のアジアの古気候」に関しては，関連した発表が5件とやや少なく，内容や手法も多様であったため，活発な議論が難しかった点は残念であった．参加者の研究対象地域や専門分野が多岐に渡っていることが本プロジェクトの特徴であるが，今後は，より具体的な共通課題や研究手法をもう少し明確にする必要があるのではないかと感じた．

全体を通してみると著者個人としては，文献等では得がたい中国やインドネシア，ベトナムなどの，詳細な地域層序や古環境の情報が得られたほか，太田享氏（早稲田大）の発表である定量的な化学風化度を算出する試みなど，興味深い発表と新しい知見が多く得られ，非常に有意義であった．また，自分とほぼ同世代の日本人及び韓国人参加者の発表はどれも質が高く，大いに刺激を受けた．

巡検

シンポジウム終了後の巡検には，8月22日から25日の4日間の日程で，韓半島南部に広がる白亜系非海成層並びに世界的に有名な恐竜足跡化石産地を見学した．

初日（8/22）はリムジンバスでソウルを出発し，最初の巡検地であるヘナム郡の恐竜足跡化石産地及び恐竜博物館に向かった．韓半島最南西部に位置するヘナム郡まで，高速道路を約5時間という長い道のりであったが，バスは非常にゆったりとした快適なシートのため，参加者は皆ほとんど疲れることなく最初の巡検地に到着した．ここでは上部白亜系Uhangri層の灰色凝灰質砂岩及び泥岩からなる湖成層中に，節足動物の這い跡や，翼竜類や鳥類，大型竜脚類など数多くの足跡化石が残されているのが観察された．これらの露頭の一部では，その上に建物が構築され，巨大な足跡化石を直接屋内で観察出来る博物館となっていた（図3）．足跡化石産地のそばには，昨年完成したばかりという韓国初の本格的な恐竜博物館があり，我々もその豊富な展示物を見学した．驚くべきことに，この博物館は入館料が無料であり，韓国の自然科学に対する熱の入れ様が感じられた．博物館の見学後には，クワンジュ市へ移動し，今回の巡検案内者の一人であるMin Huh氏の所属する，チョンナム大学の韓国恐竜研究所を訪問した．Huh氏の詳しい解説により，最近発見されたHypsilodontidの貴重な標本や，足跡化石のレプリカなど，韓国の恐竜研究の現場を実際に見学することができた．

二日目（8/23）は，クワンジュ市からボソン郡へ移動し，海岸沿いに露出する恐竜の卵化石の露頭を見学した．ここでは上部白亜系Yucheon層群Seonso層の赤紫色を呈する扇状地末端及び氾濫原堆積物がみられ，氾濫源堆積物の泥岩層からは200個以上もの卵化石及び巣の化石が発見されている．Huh氏の案内により，多数の卵

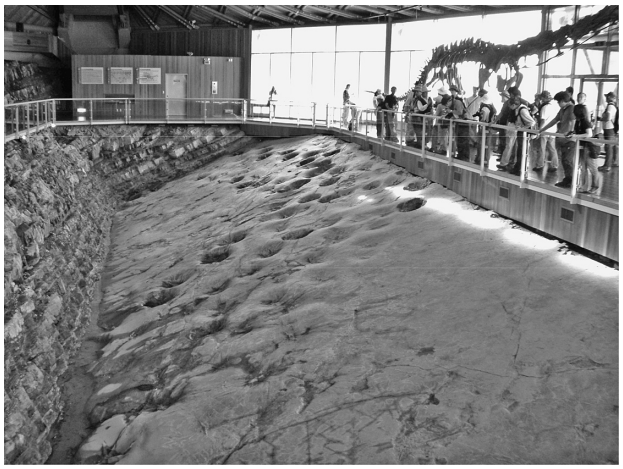


図3．ヘナム郡の恐竜博物館．巨大な竜脚類の足跡化石の露頭を館内で観察出来る．

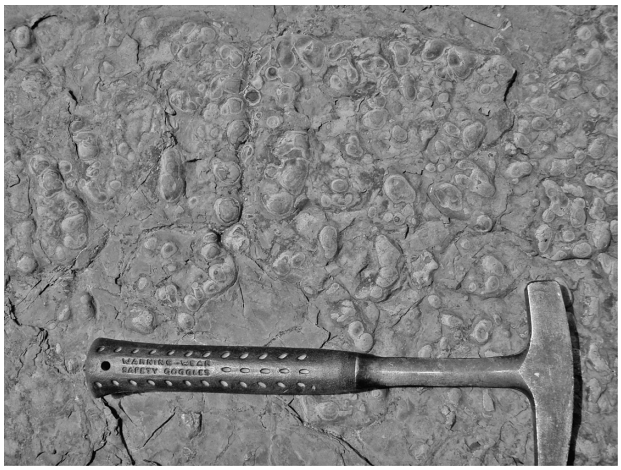


図4．白亜紀前期Gyeongsang累層群Hasandong層の湖成層中に見られるストロマトライト．

化石の産状を実際に観察することが出来た．昼食後はヨス市へ移動し，船に乗り込んで離島（チュド島，サド島）へ渡った．ここには白亜紀末期（Campanian-Maastrichtian）の湖成層が露出しており，リズマイトやフレーザー層理，リップルマーク，乾裂構造などの堆積構造の他，獣脚類や鳥盤目などの足跡化石が多数見られた．同島はまた，ティラノサウルスの巨像に加えて，各所に解説板も設けられており，日本の御所浦島を彷彿とさせるような，島全体が恐竜公園となっており，日本と同様に，韓国でも恐竜人気が非常に高いことを実感した．なお，この日の見学地を含めた今回の巡検地である韓半島南部の恐竜化石産地は，現在Huh氏らが中心となってユネスコ世界遺産に登録されるよう活動中であり，この日の巡検には地元テレビ局も同行した．巡検参加者達の何人かはインタビューも受け，その模様は夕方のニュースでも放送された．今回の巡検は，韓国のユネスコに対するPRの一貫にもなっていたようだ．

三日目（8/24）の午前中はチンジュ市にて，白亜紀前期のGyeongsang累層群Hasandong層を観察した．このセクションの案内者はPukyong国立大学のIn Sung Paik氏と本プロジェクトリーダーのLee氏という堆積学を専門とする二人ということもあり，蛇行河川のポイントバーや氾濫原堆積物中に発達する様々な古土壌相（calcrete，rhizolith，vertic paleosol），そして介在する湖成層の乾裂構造やストロマトライト（図4）など，陸成の堆積システムを理解するうえで極めて重要な堆積構造を次から次へと詳しく説明してくれた．猛暑の下ではあったが多くの参加者が熱心に観察していた．午後になると，チンジュ市を出た後にゴソンへと移動し，恐竜足跡化石産地として観光名所にもなっているDeokmyeongri dinosaur track siteを訪れた．ここでは，上部白亜系Jindong層の湖成層中に多数の足跡化石が露出しており，恐竜が当時ここを縦横無尽に歩き回っていたことがわかる（図5）．Huh氏が，自らの足で足跡化石をトレースする事で恐竜がどのようにして歩いていたかを復元し，それまでは見えなかった足跡化石をどんどん見つけていく様子は印象的だった．ところで，韓国では足跡や卵化石は数多く発見されるものの，なぜかこれまでは体骨格化石がほとんど発見されていなかった．しかし，本巡検中にも国立科学博物館の真鍋氏を始めとする多くの参加者が地層中から恐竜の骨化石を発見し，同氏は今後韓国でも体骨格化石がどんどん発見されていくだろうと述べていた．今後の韓国の恐竜研究の発展が楽しみである．

図5．Deokmyeongri dinosaur track siteにて，恐竜足跡化石を囲む巡検参加者．

最終日（8/25）は，釜山港付近の海岸に露出する上部白亜系Yucheon層群の火山砕屑岩を観察した．九州大学の坂井氏によると，このYucheon層群の火山砕屑岩はその層相，火山組成（安山岩質）などが西南日本の関門層群の下関亜層群に酷似しているとのことである．日本海を挟んで日本・韓国南部両地域が後期白亜紀において共通のテクトニック場，火山活動場にあったことを実感できる露頭に感銘を受けた．この日も猛暑に見舞われ，参加者は皆，観察後にはサウナから出てきたような汗だくの姿になっていた．また，この日は参加者の一人が迷子になるというハプニングもあり，主催者側の韓国の学生さん達が猛暑の中を走り回って探すという事態になっていた．こうした主催者側の綿密な準備と尽力のお陰で，巡検は参加者全員が大満足するという成功裏に終えることができたと言えよう．参加者の一人として，Lee氏始めスタッフの皆様に，深く感謝を表したい．

来年度のモンゴル会議の紹介

次回のIGCP507第3回国際シンポジウムは，2008年8月15日から20日の日程でモンゴルにて開催されることが既に決まっている．著者は準備委員として関わっているので，ここで巡検の概要を紹介したい．

シンポジウムは8月15日と16日の2日間に渡って，首都ウランバートルの中心部にあるチンギスハーンホテルにて催される予定である．シンポジウム終了後，8月17日から20日の4日間の日程で，モンゴル南部ゴビ地域に露出する白亜系陸成層の巡検が行われる．巡検地は南ゴビ県の中央部に位置する，バヤンザク，ツグリキンシレ，アブドラントヌルという3地域で，これらは世界的に有名な恐竜化石産地でもある．ウランバートルから南ゴビ県ダランザドガド市までの往復は航空機を利用し（1時間半），ダランザドガドからバヤンザクまではバスを利用する（2時間強）予定である．宿泊はバヤンザクに位置するツアーリストキャンプを利用し，遊牧

民であるモンゴル人固有の住居であるゲルを模したゲルホテルに宿泊する予定である（ベット・シャワー付き）．

ここで，モンゴルの巡検地の地質や研究史について簡単に紹介する．モンゴルの白亜系は全て陸成層からなり，大局的には下部白亜系が湿潤気候を特徴付ける湖成層（Barremian-Aptian）および石炭層（Aptian-Albian）から成るのに対し，上部白亜系は乾燥気候を特徴付ける砂漠堆積物及び河川成層（主に赤色岩：Cenomanian-Maastrichtian）により構成されている．巡検では，この前期白亜紀から後期白亜紀にかけてのモンゴル地域の古環境および古気候変動の記録を観察する事を目的としている．バヤンザクとツグリキンシレは，白亜紀後期Campanian期に堆積した，砂漠堆積物と半乾燥気候下の土壌中に形成されるcalcreteを主体とする．両地域とも世界的に有名な恐竜化石産地であり，特にバヤンザクは，アメリカ自然史博物館が派遣した，中央アジア遠征隊（リーダー Roy Chapman Andrews）が1922年に世界で初めて恐竜の卵化石を発見したところとして知られ，別名Flaming Cliff（炎の崖）とも呼ばれている．ツグリキンシレは1960年代に行われたポーランド･モンゴル共同調査隊によって発見された恐竜産地で，肉食恐竜であるヴェロキラプトルと，草食恐竜であるプロトケラトプスが，絡み合ったまま（闘っている最中のような姿勢で）化石になった“闘う恐竜”が見つかった産地としても有名である．アブドラントヌルは1970年代のロシア･モンゴル共同調査隊によって発見された恐竜産地で，白亜紀前期の湖成層と白亜紀後期の河川成層の両者が露出している．ここでは，1993年から今もモンゴルで発掘調査を行っている林原博物館の調査隊により，白亜紀後期の河川成層中の氾濫源に堆積した泥岩層中から多数の恐竜の足跡化石も発見されている．三つの地域ともに恐竜を始めとする脊椎動物化石を豊富にするので，巡検中に，参加者によって何らかの化石が発見される可能性もある．

モンゴルの恐竜化石産地のほとんどは，都市から数100km離れた砂漠地帯に位置するため，このような大掛かりな学会巡検が行われるのは極めて稀である．この貴重な機会を逃さず，多くの方が参加されることを期待する．この第3回国際シンポジウム及び巡検に関する詳しい情報が必要な方は，国内コーディネータの金沢大学長谷川卓氏まで連絡いただきたい（jh7ujr@kenroku.kanazawa-u.ac.jp）．最後に，この小文執筆を勧めて下さったIGCP507共同リーダーの坂井卓・長谷川卓両氏，および粗稿を校閲していただいた安藤寿男氏に深く感謝を表したい．

長谷川　精（東京大学大学員院理学系研究科）

「第9回太平洋地域新第三系層序に関する国際会議」参加報告

概要

去る2007年10月1日～10月3日に，茨城県つくば市にある筑波大学および産業技術総合研究所において，第9回太平洋地域新第三系層序に関する国際会議（9th RCPNS：The Regional Committee on Pacific Neogene Stratigraphy）が開催された．本国際会議の主催は，国際地質科学連合（IUGS）層序委員会の中の小委員会であるRCPNS国際組織委員会（Regional Committee of Circum Pacific Neogene Stratigraphy）と国内実行委員会（委員長：小笠原憲四郎，筑波大学生命環境科学研究科，地球進化科学専攻）である．また筑波大学生命環境科学研究科と産業技術総合研究所（地質情報研究部門）が共催となり，さらに日本古生物学会，日本地質学会，石油技術協会の後援をいただいた．

本会議は太平洋地域の新生代層序と年代，地質学的事件の解明を目的として1976年から催されており，今回が9回目の開催となる．事前に会議参加の登録をした研究者は，8ヵ国100名以上であり，さらに筑波大学地球進化科学専攻の教員と院生などが事務局として加わり，実り多い議論が交わされた．講演は招待講演8件，口頭発表28件，ポスター発表20件の合計56件であった．特に3日間にわたり各40分の時間で配置された8件の招待講演では，最新の年代・層序や古環境復元，地質学的事件の詳細やその原因などに関する話題が提供され，非常に充実した内容であった．

筑波大学におけるセッション(1日目，2日目)

10月1日および2日の会議は筑波大学会館国際会議室において行われた．初日には「最近の太平洋地域各国の新生代層序の進歩」を課題にしたミニ・シンポジウムが開催され，新生代層序の検討や比較精度に関する活発な議論が行われた．ポスターセッションも国際会議室横の小会議室にて随時行われ，コアタイムには発表者と閲覧者との間でさまざまな意見交換が行われた．また休憩時間においても，ポスターを前にして参加者達が話し合う光景が多々見られ，議論の熱が冷めることはなかった．ポスターセッション会場の隣にはカフェテリアが設けられ，交流の場として活用されたほか，研究者達が就職に関するアドバイスを院生やポスドクに与える一幕も見られた．

図1．筑波大学会館国際会議室にて，学生・研究者の集合写真．

初日夜には大学会館レストランにおいてウェルカムパーティーが開催された．並木琴の会による琴の演奏イベントを皮切りに，各分野の先生方によるユーモアに富んだスピーチが会場の笑いを誘った．また会場にデジタル顕微鏡を持ち込み，アルコールを片手に微化石群集の国際検討会を行うグループまでもが現れた．これも多種多様な分野の研究者が集う本国際会議ならではの 風景だといえよう．

2日目は，以下の5つのセッションが開催された．(1)Miocene planktonic foraminiferal biostratigraphy and new time scale calibration. (2) Cenozoic stratigraphy and climate change of SE Asia. (3) Neogene stratigraphy and sedimentary events of SE Asia. (4) Cenozoic diatom biostratigraphy and paleoceanographic events. (5) Neogene floras and paleoclimate. また，2日目の最後には大学会館会議室において，7カ国13名のメンバーによる国際組織委員会が開催された．議題は今回の開催準備と参加状況報告，特別表彰，Proceedings刊行計画，次回第10回RCPNSの開催場所と委員長の選出，その他であった．ここで議論の結果，Jim Ingle, 土　隆一両氏に国際組織委員会が特別表彰 することと，Proceedingsの編集体制が承認された．さらに次回 はニュージーランドで開催することが承認され，委員長の選出もニュージーランド側の委員に一任することで了承された．

余談であるが，参加者達の宿泊場所には大学会館宿泊センターおよびつくば市内の ホテルが利用された．宿泊手続きに関して大きなトラブルはなかったものの，海外からの参加者の一部には生活習慣や食文化の違いによる戸惑いを訴える方々もあり，事務局が宿泊

施設との交渉に奔走する場面もあった．これによって国際間の文化的相違を改めて学んだ事も，極めて有意義な経験であった．

産業技術総合研究所におけるセッション（3日目）

会議最終日の10月3日には，会場を産業技術総合研究所共用講堂大会議室へと移した．同日には，以下の4つのセッションが行われた．(1) Cenozoic molluscan biostratigraphy and paleoceanographic events (Part 1)．(2) Cenozoic molluscan biostratigraphy and paleoceanographic events (Part 2) (3) Noegene biostratigraphy and sedimentary events of Sendai area, NE Japan. (4) Ostracoda biostratigraphy and paleocenographic events. また，ポスターセッション会場やカフェテリアは共用講堂内の会場に移設され，議論の場として活用された． 午後には，地質標本館の見学も行われた．

3日目の夜には共用講堂脇の食堂において懇親会が行われた．この懇親会に は，産総研からの来賓を迎え，第1回RCPNS開催当時の思い出話などを伺うことも出来た．また，小笠原氏の発案により，研究対象地域ごとに分かれての談笑や写真撮影なども行われ，親交を結ぶことが出来た．

巡検

本会議の後，10月4日から6日の2泊3日の日程で，常磐炭田と仙台地域の第三系を対象とした地質野外巡検が藤原　治氏（産業技術総合研究所）と島本昌憲氏（東北大学）の案内で実施された．この巡検には，アメリカ，ロシア，日本から12名が参加した．巡検1日目は福島県いわき市広野町周辺の三箇所で，(1) 漸新統浅貝層より産出する貝化石，(2) 漸新統白坂層および下部中新統椚平層との不整合関係，(3) 亀の尾層における新第三紀中新世の珪藻質頁岩を見学した．また，巡検2日目には仙台市周辺に分布する中新統旗立層および茂庭層，鮮新統仙台層群大年寺層，中新統七北層および青麻層の各露頭 を観察した．巡検中は 天候に恵まれ，非常に良い条件で 観察を行うことが出来た．

図２．巡検初日，露頭観察の様子．

図３．巡検最終日．巡検に参加した学生・研究者の集合写真．

終わりに

今回の国際会議において，国外・国内における第一線の研究者の方々と 会い，実際にサンプルや データをみながら議論をすることができたことは非常に有意義な経験であった．次回，ニュージーランドで開催予定の本会議は，記念すべき第10回目であり，なおいっそうの発展が予想される．学部生や大学院生の皆さんにも，ぜひ参加を 勧める次第である．

最後にこのシンポジウムの企画・運営に関わられた方々，そして巡検の案内者各位に心より感謝いたします．

芝原暁彦（筑波大学生命環境科学研究科，地球進化科学専攻）

古生物学スプリングワークショップ2007『The 解剖学』開催報告

はじめに

2007年3月19日（月）～21日（水），東京大学三崎臨海実験所で古生物学スプリングワークショップ2007『The 解剖学』を実施した．講師には，東京大学総合研究博物館の佐々木猛智氏（軟体動物）と札幌医科大学の鈴木大輔氏（脊椎動物）を迎え，世話人3名，講師2名以外に，29名（病欠1名）の参加者があった．その内訳は，大学教員1名，ポスドク・研究生1名，学生24名（学部生9名，修士課程大学院生4名，博士課程大学院生11名），博物館学芸員２名，その他1名である（図1）．

図1．ワークショップ参加者の集合写真．

開催の経過

本ワークショップの企画は，2007年2月2日の日本古生物学会評議委員会で承認され，同日より学会のホームページや第156回例会（2007年2月2-4日）でのポスターの掲示およびビラの配布などで掲示を行い，2月6日に学会から会員宛にメールを送って頂き，参加者募集を行った．その結果，2月9日には早くも定員の30名に達し，参加募集を締め切った．募集開始から約1週間で定員に達成したことから，本企画に対する関心の高さを感じるとともに，メールによる情報提供やホームページの有効性を実証した結果となった．

ワークショップの概況

脊椎動物の解剖講義および実習

ワークショップ当日のスケジュールを図2に示す．3月19日（初日）

3月19日（月）
10:00〜13:00…磯採集（希望者のみ参加）
13:00〜13:50…受付
14:00〜17:15…脊椎動物解剖学講義（講師：鈴木大輔先生）
17:15〜17:45…話題提供「豊橋市自然史博物館における現生脊椎動物の骨格標本の収集・製作・収蔵について」（安井謙介氏：豊橋市自然史博物館）
18:00〜18:30…夕食
19:00〜22:30…懇親会および話題提供「The evolution of Azygonyx and Esthonyx at the Paleocene-Eocene boundary at Bighorn and Clarks Fork Basins: Evidence of Bergman's low in the early Eocene」（森浩嗣氏：Brigham Young University），「ワニの歩行様式について」久保　泰氏：東京大学）

3月20日（火）
09:00〜15:30…脊椎動物解剖実習
12:00〜12:30…昼食
13:00〜15:30…脊椎動物解剖実習
16:00〜17:45…軟体動物解剖学講義（講師：佐々木猛智先生）
18:00〜18:30…夕食
19:00〜22:30…懇親会および話題提供「四足動物の姿勢復元について」（藤原慎一氏：東京大学），「海洋生物調査の実際」（ロバート・ジェンキンズ：東京大学）

3月21日（水）
09:00〜11:30…軟体動物解剖実習
12:00〜12:30…昼食
13:00〜14:30…軟体動物解剖実習
15:00　　…ワークショップ終了

図2．ワークショップ当日のスケジュール

図3．ワークショップにおける講義風景．(A) 鈴木大輔氏による脊椎動物解剖学の講義風景．(B) 佐々木猛智氏による軟体動物解剖学の講義風景．

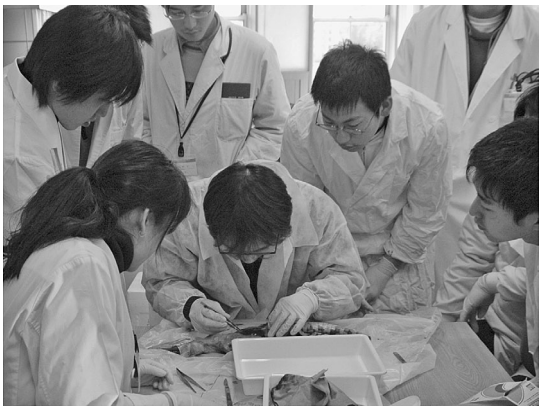


図4．ワニの解剖実習の様子．鈴木氏による見本解剖を注視する参加者達．

の午前は，希望者による磯採集を行ったが，専門家による分類群の解説もあり有意義な時間となった．午後の講義（鈴木大輔氏）では，約3時間にわたりワニの筋骨格系及びそれに関連する神経系の解説が行われた（図3-A）．この講義を踏まえて，3月20日（2日目）午前にワニの解剖学実習を行った（図4）．全長80cm程度の小型のワニ3体を用いて解剖実習を行った．解剖は皮剥ぎから開始したが，この作業に予想以上に手間取り，各部位の筋骨格系や神経系の観察に至るまでにかなりの時間を費やした．解剖している手元付近を全員が観察することが困難なため，デジタルビデオカメラとプロジェクターを利用し拡大投影したが，映像があまり不明瞭でなく，大型液晶ディスプレイなどが必要であることに気がついた．しかし，こうした悪条件下での観察だったにもかかわらず，参加者は生々しい臭いと格闘し，文字通り「生」の迫力ある解剖を体感することができた．

軟体動物の解剖講義と実習

ワニの解剖実習の終了した２日目夕方には，佐々木氏による軟体動物解剖学の講義（ホタテガイ，コウイカ，サザエなどを事例としたボディプラン，外部形態，各器官の解説）が行なわれた（図3-B）．3月21日（最終日）は午前9時から午後2時半まで，前日の講義内容をもとにした軟体動物（ホタテガイ，コウイカ，サザエ）の解剖学実習を行った（図5）．ホタテガイとサザエは各自１個体，コウイカは2人で１個体配分し解剖を行った．標本は解剖しやすいように事前に軽くゆでて身を締まらせ，エタノールに浸した．この実習中も同様に拡大映像を投影した．当初の予定では，初日午前中に磯で採集した軟体動物なども解剖を行う予定であったが，時間不足のため実施することができなかった．

図5. 軟体動物の解剖実習の様子. 参加者達の解剖を見守る佐々木氏.

その他の実施事項

今回のワークショップでは，上記以外に，安井謙介氏（豊橋市自然史博物館）による「豊橋市自然史博物館における現生脊椎動物の骨格標本の収集・製作・収蔵について」（初日の鈴木氏の講義終了後）の話題提供があった．また，初日および2日目の夕食後に懇親会を開催し，参加者同士の情報・意見交換を行うとともに親睦を深めながら，各日2件ずつの話題提供に耳を傾けた(図1)．特に，初日夜の久保　泰氏(東京大学）によるワニの歩行に関する話題提供は（図6），翌日の解剖実習の際に重点的に観察すべき箇所を見きわめるのに参考になった．

図6．懇親会時の話題提供の様子（話題提供者：久保　泰氏）

改善すべき点

ワークショップの開催を通じて，世話人として運営・内容の両面でいろいろな反省点を感じた．まず，世話人らにとって，解剖の実習と講義を扱ったワークショップの企画運営は初めてで，どの程度の内容，スケジュール，参加人数が妥当なのかを予測することが難しかった．結果からすると，30数名という参加人数が上限であろう．また，脊椎動物と軟体動物の解剖学講義・実習を2泊3日で行ったが，詰め込みすぎたけらいがあった．実習に多くの時間を割けるように，もう少しゆとりあるスケジュールを組むべきであった．もし次回があるとすれば，特定の機能や構造に焦点を絞ったメニューで行うのがよいと考えられる．

本ワークショップでは，実習の理解を深めるために参考資料を事前に配付したが，脊椎動物（ワニ）に関しては，専門用語が多く，多くの参加者には難しく感じられたようだった．やはり，用語の重点的な事前予習が必要である．

解剖用の標本調達に関しては，大きな誤算があった．標本購入費の見積もりの違いから，結局人数分のコウイカすら用意することができず，ワニに至っては，小さなものを僅かな数しか入手がかなわなかった．全てを参加人数得分揃えることは難しいにせよ，「解剖実習」を標榜したワークショップとしては，不十分であった．

実習費用に関しては，施設使用料（講義や実習を行ったゼミナール室や実習室使用料）の他に，参加者の宿泊費，食費，保険代，講師旅費，標本購入費，解剖用メス替え刃やハサミなどを含む消耗品費に充てられた．この費用は当初の予算を上回ったが，参加費値上げ，棚部一成氏（東京大学）の寄付，古生物学会からの援助，一部世話人の研究費などでまかなった．

【講義と実習について】
Q1. 講義は難しかったですか？(難しい・適切・簡単)
Q2. 講義時間は適切でしたか？(長い・適切・短い)
Q3. 講義資料について，改善点など自由にお書きください．
Q4. 講義全般について改善点などがあればお書きください．
Q5. 講義と実習は分離して実施しましたが，これは適切だったと思いますか？(一緒にすべき・適切であった)
Q6. 実習時間の長さは適切でしたか？
Q7. 実習時にビデオを使用して拡大映像を流すなどしましたが，これは必要でしたか？また改善点などについてお書きください．(必要・不必要)
Q8. 実習に関して改善すべきところなどをご指摘ください．
【運営に関して】
Q9. ２泊３日という期間は適切でしたか？(長い・適切・短い)
Q10. 開催場所として，三崎臨海実験所をどのように思いますか？他に良い場所などがありましたらお書きください．(適切・不適切)
Q11. 参加費１万円（宿泊費・食費など込み）は適切でしたか？(高い・適切・安い)
【全般】
Q12. 今回は脊椎動物（ワニ）と軟体動物（ホタテ・サザエ・イカ）でしたが，他に解剖したい分類群があればお書きください．
Q13. 良かったところ，悪かったところなど何でも自由にお書きください．

図7．ワークショップ終了後に実施したアンケート13項目の内容．

さらに，本ワークショップ終了後に，13項目のアンケート調査を行った（図7）．集計の結果はインターネット上（http://www.paleo-fossil.com/~psw2007/questionnaire.pdf）に公開している．脊椎動物の講義に関しては，内容の難しさの割には講義時間が十分でないと大半の参加者が感じたようである．その理由として，専門用語の多さや事前の予習不足などをあげる意見が多かった．実習時間の長さについては，脊椎動物と軟体動物ともに「適切」という意見が半数以上，「短い」が3割であった．さらに，実習時のスタッフ数の不足や標本の状態が良くないことを指摘する意見もあった．実習期間に関しては，2泊3日では短いという意見が数名からあったが，参加費（宿泊費や食費込みで1万円）については，「適切」もしくは「安い」という意見が大半を占めた．

以上のアンケート結果から，的を絞った資料の事前配付と予習案内が必要であること，3泊4日程度の実習期間が適切であることが示唆される．

総括

本ワークショップでは，生物の硬組織（殻や骨）の研究をするためにも，軟組織の観察がいかに重要であるかを理解することに主眼をおいた．そのため，今回のワークショップでは，古生物学者の多くが実体験することの少ない現生生物の解剖実習を通じて，化石の硬組織からどのような軟体部の情報を抽出できるのか，化石となった生物の生きていた姿をどのように復元できるのかをより深く理解し，学んでいくことを目的として企画された．解剖学を学ぶことで，参加者の生物に対する視野が広がり，それが各々の研究に反映されることになれば，本ワークショップの意義があったといえるだろう．少なくとも世話人らの視野は確実に広がり，生物の硬組織を理解するには軟体部の理解が不可欠であることを実体験から再認識することが出来た．

今回は最初の試みであったため，手探りの面が多かった．いろいろと改善すべき点はあったものの，概ね好評を博したと感じている．このような企画の継続を望む声も多かった．古生物を学ぶ若手研究者が，本格的な解剖を体験する機会は非常に少ないため，今回のようなワークショップの定期開催の必要性を強く感じた．

謝辞

ワークショップを開催するにあたり，多くの方々のご協力を賜った．佐々木猛智（東京大学総合研究博物館），鈴木大輔（札幌医科大学）の両氏には多忙の中，ワークショップでの講義と実習指導を快諾して頂いた．また，東京大学三崎臨海実験所にはワークショップの場を提供して頂いた．国立科学博物館にはワニ骨格標本をお借りした．（株）小池ワニ総本舗には解剖に用いるワニ標本を格安でご提供頂いた．日本古生物学会の評議員ならびに事務局の方々には，始終有意義なアドバイスを頂いた．また，参加者には運営面でも多大なご協力を賜り，特に東京大学の学生諸氏には率先して準備・片づけを行って頂いた．ここに記して謝意を表す．

大橋智之（東京大学生産技術研究所）・ロバート・ジェンキンズ・大路樹生（東京大学大学院理学系研究科）

「The 解剖学」参加報告

古生物学スプリングワークショップ2007「The 解剖学」に参加した当時，筆者の一人（岡庭）は名古屋大学理学部地球惑星科学科の古生物学分野の研究室に4年生として所属していた．本ワークショップのことは所属研究室の須藤斎助手（当時．現在，助教）の紹介によって知った．ワークショップでは脊椎動物と無脊椎動物の両方の解剖学講義および実習が行われるとのことで，卒業研究で脊椎動物（魚類）を扱い，修士課程で無脊椎動物（二枚貝類）を扱う予定であった岡庭にとって大変に興味深いものであった．さらに，それぞれの観点からの新たな発見を期待していた．しかし，開催地が神奈川県三浦半島と，名古屋から気軽に行ける距離では

ない．学会やワークショップに参加したことがなかった岡庭にとって，本ワークショップへの一人での参加は大変心細く，参加しようかどうか躊躇していた．後日になって，同じ研究室の数名のメンバーがワークショップに参加すると聞き，急遽参加の意向を固めた．一人で参加するのは不安であったが，参加者に数名でも知り合いがいるというのは非常に心強いものであった．

ワークショップの開催会場は，神奈川県三浦半島の先端にある東京大学三崎臨海実験所であった．実験所付近から望む油壺湾は，神奈川県景勝50選に選ばれる程の素晴しい景色で，澄み切った青空とエメラルドグリーンの海がとても鮮やかできれいであった．また，景色同様に海水もきれいに澄んでおり，磯を歩くときには気をつけていないと潮溜まりに足を突っ込むことになってしまう程であった．海生生物も豊富で，小魚が集団で泳いでいたり，スガイやカサガイやネリタやタカラガイ，アメフラシやウミウシといった軟体動物が至るところで観察されたりと，磯採集をしていても面白い海であった．その一方で目を引いたのは，立派な互層を成した三浦層群の存在であった．細礫を密に含む角礫岩と砂岩の互層が海岸で観察されるのをはじめ，林道では細角礫や凝灰岩が薄くきれいに砂岩中に入り込む露頭が観察されたり，実験所のすぐ近くで小断層が観察されたりするなど，地質学的にもとても面白い地域であるという印象を受けた．

ワークショップの主なイベント構成は，19日と20日の前半に札幌医科大学の鈴木大輔先生による脊椎動物の解剖学講義および実習が行われ，20日の後半と21日に東京大学総合博物館の佐々木猛智先生による無脊椎動物の解剖学講義および実習が行われるというものであった．岡庭は当初，脊椎動物と無脊椎動物の両方に興味があったが，脊椎動物の解剖用実習標本としてワニが用意されるということで，特に脊椎動物の実習に興味を持った．それというのも，岡庭は卒業研究中にコイ，大学の生物実験においてラットを，それぞれ解剖した経験があったが，爬虫類，しかもワニを解剖したことはなかったのでつい興奮してしまったのである．ワニを解剖する機会に恵まれることは，人生で一度あるかどうかわからないと思ったからである．

そんな期待に胸を躍らせる中，脊椎動物解剖学講義が始まった．鈴木先生の講義は要点が明確で，初めて解剖学の講義を受ける我々にもわかりやすい構成となっていた．講義において非常に印象に残っているのは，「ワニは哺乳類とは綱のレベルで異なるのだから，筋の形や付き方が哺乳類と異なるのは当然である」，「筋で理解するのではなく，それを司る神経で理解する」，「筋の名前は筋が付着している骨と骨の名前に由来する」という見方・言葉であった．そういった基本的な見方や心構えを前提として講義が進んだため，ヒトとの筋の違いを納得しながら講義を聴け，講義に対する理解も深まった．また，古生物を研究する上で現生生物の解剖をすることの意義を示してくれたことは，今後自分で化石を扱っていく際に多大な影響を与えるであろう．しかし，講義で取り上げられた内容自体は決して簡単と言えるものではなく，鈴木先生がスライド上で説明されている骨や筋の名称や構造を追っていくことだけで精一杯という場面もしばしばであった．流れ行くスライドと飛び交う専門用語の荒波に翻弄されながら，世話人の方から事前にアドバイスをいただいていた通りにしっかりと予習をしてくれば良かったと心底後悔した．講義を受けた段階でそういった状況だったので，解剖実習に付いていけるのかを大変心配であった．

解剖実習で用意されたのは全長80cmもの3個体のワニであった．世話人の方々によると「ワニは尾部が長いため全身としてはそれ程大きくはない」という話ではあったが，それでも実際に間近で見てみると今にも動き出さんばかりの迫力を持っており，ゴツゴツしたうろこと鋭い歯をしっかりと携え，身体は小さくとも立派なワニであった．いざ解剖実習が始まると，講義で教わったようなわかりやすい神経や筋の見え方ではなかったため，目の前でそれらをピンセットで摘み上げて説明してもらい，初めて認識することができた．そういった具合であったので，先生が「解剖したい人はいませんか」と尋ねられたときでも自ら挙手することができなかった．これは大変勿体ないことであったが，自分でメスを執って解剖するよりも付いて回って，先生が解剖しながら説明されているのをじっくりと聞いている方が勉強になると思ったのである．

参加者の中には同じように考えていた人もいたようで，先生の周りには常に多くの参加者がおり，皆が先生の手元に注意深く見入っていた．あまりに多くの参加者がひとつのテーブルに集中していたために，立ち位置によっては解剖されている標本の様子が見えづらいこともあった．しかし，先生の手元をビデオカメラでスクリーンに大きく映し出すという世話人の方の工夫もあり，先生の解説とともに，皆が充分に標本を観察することができた．

結局ワニを解剖するという経験はできなかったが，こちらの方がずっと自分にとって勉強になったであろうと考えている．また，ワニの手足をいろいろな方向に回したり動かしたりすることで，どの方向に手足を動かすときにどこの筋が使われているのかということを観察することができて非常に面白かった．そして，ワニで筋の動きを観察した後で自分の手足を動かしてみて，「なるほど，人間だとここととここの筋を使っているのか」と言ってひとりで感心していた．岡庭はこれまで骨格にばかり目が向いており，神経や筋に対してはほとんど無関心であった．しかし，今回のワニの解剖実習を経て骨格だけでなく神経や筋にも興味を抱くようになった．そして，今後何度脊椎動物の解剖を行う機会があるかわからないが，その機会に遭遇した際には骨格だけでなく神経や筋をも注意深く観察し，本解剖実習で培った知識や心構えなどを充分に活かしていこうと思ったものである．

脊椎動物解剖学講義実習に引き続き，無脊椎動物解剖学講義実習が行われた．和田は自分自身の専門である軟体動物の解剖を楽しみにしていた．実習のために用意された生物がホタテ，サザエ，コウイカといった私たちの食卓にもしばしば上がる身近な材料であったことから親近感が湧き，講義の段階から集中して佐々木先生のお話を聞くことができた．ホタテとサザエは食材としては日頃から目にしていたもののこれまで解剖学的な見方をしてこなかったため，佐々木先生のひとつひとつの説明が新鮮であり，また，頭の中に実物を描きながら講義を受けることができた．コウイカについては，日頃見慣れていないせいか講義を受けている最中もなかなかイメージが湧いてこず，板書をただ書き写すだけになってしまった．

解剖実習では，ホタテとサザエが参加者にそれぞれ１人１個体ずつ，コウイカは参加者２人に１個体ずつ与えられた．実習が始まり，いざ実物のホタテやサザエ，コウイカを目の前にすると，頭で思い描いていたような単純な構造ではなく，どこからどのようにハサミを入れて良いものかと呆然としてしまった．講義メモを参考にしながら解剖を続けていたが，どうしても行き詰まることがしばしばあった．そんなときには先生に質問して教えてもらう他はなかったのだが，佐々木先生は参加者の解剖の様子を見回っていたので，即座に質問に答えてもらうことができ，そのお陰で滞りなく解剖を進めていくことができた．しかし，それでもコウイカの解剖では内臓が脆く，ドロドロに溶けてしまっている部位もあり，先生が講義で説明されていたような内臓の配置などを充分に観察ができたとは言い難かった．ホタテとサザエに関しては，標本の状態が良く，ひとつひとつの臓器を細かく観察することができた．サザエもホタテもスーパーや市場などでよく目にし，口にするものなので，解剖しているというより，調理している感覚であった．コウイカはオスとメスでつくりが異なり，二通りの楽しみがあった．軟体動物の解剖ではいずれの標本も自分自身の手で自由に行うことができたので大変満足だった．残念であった点は，１日目午前中に採集した磯の生物を解剖する時間があまりとれなかったことである．

本ワークショップでは解剖学の講義と実習以外にも懇親会や話題提供が行われた．我々はワークショップというものに初めて参加したが，懇親会ではさまざまな生物を対象とした研究行っている先生や学生と，大学や学年，分野の垣根を越えて知り合いになり，普段の研究生活などの話を聞くことができた．特に，当時の我々と同じ学部生であった他大学の参加者からは卒業研究や大学

院への進学等に対する悩みや不安，楽しみや期待など，自分自身と同じ高さの目線であるからこそ共感できる話をすることができた．これらのことは，普段外部との接触の機会の少ない我々にとって外の世界を覗く良い機会であったし，今後の研究生活を送っていく上でも共に頑張っている学生がたくさんいるのだということを実感する良い経験となった．全体を通して気になった点は，時間の短さである．三日間で，脊椎・軟体動物の両方の解剖実習を行うのはハードであると感じた．とは言え，両方の解剖を行うことで双方の相違点を見いだすことができた点は良かった．解剖は講義だけではなかなか理解することが難しいが，自分で解剖し，観察することで多くのことを学ぶことができ，三日間という短い期間ではあったが，本当に有意義な時間を過ごせたと思う．

本ワークショップで得たのは解剖学に関する知識だけではなかった．さまざまな人との交流を通して自分の研究へのモチベーションを高めることにもなった．今後，学会やワークショップに参加する際には積極的に参加者との交流を持ち，それぞれの分野の最新の研究についての話や研究生活，学生生活についての話ができたら良いと思う．

最後に，この場をお借りして本ワークショップで講義実習の講師であった鈴木大輔先生（札幌医科大学）と佐々木猛智先生（東京大学）および企画運営に携わってくださった先生方，世話人をはじめとしたスタッフの方々，東京大学三崎臨海実験所の職員の方々に深い謝意を表したい．

岡庭信幸（東京大学大学院理学系研究科）・和田行弘（愛媛大学理学部）

学会記事

日本古生物学会（2007・2008年度）第2回定例評議員会議事録

日時：2008年2月1日（金）9:30-12:00
場所：宇都宮大学　大学会館2Fトークルーム1
出席：小笠原会長，天野，安藤，遠藤，長谷川，平野，加瀬，甲能，近藤，前田，間嶋，真鍋，西，尾田，大路，棚部，生形，柳沢
欠席：松本名誉会長，安達（→遠藤），北里（→西），松岡（→大路），大野（→前田），冨田（→甲能），植村（→真鍋），矢島（→小笠原）

報告事項

常務委員会報告（生形）

庶務（生形）

1．国立情報学研究所のNII-ELS（電子図書館）コンテンツの各機関リポジトリでの利用について，NIIに包括的な許諾管理を委託すると回答した．対象は，TPPSJNSのバックナンバーと，PRと化石の出版後1年以上経過したコンテンツである．
2．平成20年度科学技術分野の文部科学大臣表彰科学技術賞及び若手科学者賞候補者への推薦を評議員MLで募ったが，今年度は推薦がなかった．
3．2007・2008年度評議員のうち依頼のあった者に機関提出用委嘱状を送った．
4．PRの電子投稿査読編集作業に関して，UniBio Pressと業務委託契約書を交わした．
5．会員歴50年以上の永年会員に感謝状を送った．
6．前評議員の小澤智生君と瀬戸口烈司君に感謝状を送った．
7．学術会議と文部科学省に会長交代届けを出した．
8．国税局に給与支払事務所等の開設届書を提出すべく準備している．事務局職員の源泉徴収を行うために必要である．
9．地球惑星科学連合のプログラム委員に本山　功君（正）と延原尊美君（副）を推薦した．
10. Uni Bio Pressに電子出版事業参加申込書を送った．
11. 学会規則・規定・内規の別刷を100部作成した．
12. Journal@rchiveデータ作成のために，電子アーカイブへのNII-ELSコンテンツ提供依頼を情報研に送った．
13. 東北大学理学部より叙勲申請に係わる資料作成依頼があり，事務局経由で回答した．
14. 会計監査，幹事に委嘱状を送った．
15. 洋封筒に誤植が見つかったが，残部を調査した結果，ほとんど残っていないことがわかった．
16. PRに掲載された論文の金沢大学学術情報レポジトリ（KURA）への収録・公開申請に対して許諾書を送った．ただし，刊行版に限るという条件付である．対象論文は以下の通り．

Sato, T. & Kamiya, T. (2007) Taxonomy and geographical distribution of recent Xestoleberis species (Cytheroidea, Ostracoda, Crustacea) from Japan. Vol. 11, No. 2, p. 183-227.

17. 講演予稿集について石油資源開発株式会社技術研究所の宮入誠氏より使用許可申請があり，使用許可書を送った．対象と転載先は以下の通り．

対象：2006年年会予稿集36p. 小布施明子：新潟陸海域坑井における椎谷層（下部鮮新統）の渦鞭毛藻化石群集
転載先：平成18年度技術研究所公表成果集（冊子体及び電子媒体）．

18. 光記念館特別展「世界のなに？！これ！？昆虫大集合　岐阜の自然と世界の大昆虫展」への後援名義使用許可依頼に対して承諾の返事を送った．
19. 日外アソシエーツ株式会社から出版予定の「最新科学賞事典2003-2007」に掲載するデータを同社に提供した．
20. メディアリサーチセンター株式会社から出版予定の「雑誌新聞総カタログ2008年版」に掲載するデータの修正を同社に依頼した．
21. 地惑連合より，国際学術団体代表派遣会議及び代表派遣候補者の追加募集案内があった．
22. 元会長の故花井哲郎名誉会員の葬儀に学会名で弔電と献花を送った．
23. 北海道大学21世紀COEプログラム「新・自然史科学創成」事務室より，本会後援のシンポジウム「The Origin and Evolution of Natural Diversity」の報告書とプログラム・要旨集が届いた．
24. PRの図について神奈川大学の宇佐美義之君より使用許可申請があり，使用許可書を送った．対象論文と転載先は以下の通り．

対象論文：Fedonkin, M. A. (2003), 7, 9-41　Figs. 1, 4, 5, 16.
転載先：宇佐美義之 (2007), カンブリア紀の古生物たちの謎：解明される生命進化のビッグバン，技術評論社．

25. 東京大学の棚部一成君より，本会後援のシンポジウム「7th International Symposium, Cephalopods - Present and Past」の報告書と要旨集が届いた．
26. 宇都宮大学に第157回共同開催依頼状を送った．
27. 学術著作権協会より複写許諾権委託著作物の英文タイトル表記について問い合わせがあり，回答した．
28. PR競争入札のための仕様書案を作成し，落札予定価格設定のために，学術図書印刷，小宮山印刷工業，レタープレスの3社に見積もりを依頼した．
29. 常務委員MLとは別に，幹事と常務委員が参加するMLを新設した．
30. 宇都宮例会シンポジウム招待講演者大塚　攻氏の出張依頼書を広島大学に送った．
31. 学会出版物に掲載された論文の静岡大学学術情報レポジトリへの収録・公開申請に対して許諾書を送った．ただし，刊行版に限るという条件付である．対象論文は以下の通り．

Paleontological Research: Ubukata, T. 1997, Vol. 1, p.132-143.

Ubukata, T. 2001, Vol. 5, p.1. Ubukata, T. 2001, Vol. 5, p.33-44.
化石：新妻信明，1968, No. 16, 25-32. 堀部純男・大場忠道・新妻信明, 1969, 増刊号, 15-20. 堀部純男・新妻信明・酒井豊三郎, 1969, 増刊号，31-37. 新妻信明，1971, No. 21, 38-42. 新妻信明, 1987, No. 43, 2-5. 生形貴男・佐藤慎一, 1996, No. 61, 67-69. 生形貴男, 2003, No. 74, 93-94. 北村晃寿，2004, No. 75, 54-59. 塚越哲・北村晃寿・生形貴男，2004, No. 75, 16-17. 生形貴男，2004, No. 75, 46-53. 生形貴男，2004, No. 76, 151-152.
講演予稿集：加藤憲二，2001. 日本古生物学会2001年年会講演予稿集, p.37.

渉外（柳沢）

1．科研費申請等に関する引き継ぎを済ませた．
2．平成20年度の科学研究費補助金（研究成果公開促進費）学術定期刊行物の公募要領の変更に伴い，1）年間250万円超の直接出版費の契約における一般競争入札，2）学会等組織における経理管理事務および監査体制の整備，の義務化が求められる．
3．「地質の日」事業推進委員会が2008年5月10日にイベントを予定している．一般向けのパンフレットを作成しており，古生物学会に対して印刷費用の一部負担要請（1万円程度）があり，これを了承した．

会計（間嶋）

1．引継ぎを済ませた．
2．学術図書からPRのメタデータ作成費として過去2年分の追加請求があったが，前々年度の事業費用を支出することは単年度会計の原則から著しく逸脱する上に，そもそもこうした事態の原因が先方の請求怠慢にあるので，昨年度分の請求に対してのみ支払いを履行することとした．今年度分については年間精算となるが，来年度からは号毎に請求してもらうよう出版社に依頼する．
3．九州大学で保管していた165万円の口座の名義書換を早急に行う必要がある．
4．学会基金1,000万円について，基金として適当な預け先を税理士と相談中．
5．住友信託銀行にある「学会基金」160万円と郵便貯金としてある「研究委員会等助成金」60万円の謂れについて確認中．

行事（柳沢・近藤）

1．大阪年会では319名の参加があった．講演数はシンポジウム6題，特別講演2題，一般口頭発表86題，ポスター発表43題，合計137題であった．講演の取り消しが3件あった．
2．大阪年会の収入は，大会参加費が1,164,000円，予稿集および古生物学トピックスの販売が70,500円, 合計1,234,500円であった．支出は，人件費・会場費等が297,475円，プログラム・予稿集の印刷費・送料が460,625円，合計758,100円である．
3．マスコミ取材が7件あり（テレビ4，新聞3）対応に苦慮した．マスコミ対応マニュアルを事前に準備しておくことが望ましい．
4．発表者の著作権を保護するために会場での写真撮影は発表者の了解をなければならないが，これを守らない参加者があった．注意を徹底する必要がある．
5．科研費公開促進B申請などに関する一部の業務を近藤新委員に引き継いだ．
6．第157回宇都宮例会のプログラムを印刷中．電子版を学会HP上にアップロードした．講演総数は111である．
7．宇都宮大学より第157回例会の共催名義使用承諾の返事があった．これにより，会場借料が無料となる．
8．2008年年会・総会（東北大学）のシンポジウム案として「年代・環境指標としての後期新生代微古生物学の進展」が提案されている．講演者として，山崎　誠君, 木元克典君, 佐藤時幸君, 千代延　俊君, 北　逸郎氏, 山本正伸氏, 秋元和實君, 桑田　晃氏, 相田吉昭君，岩井雅夫君，鈴木紀毅君，谷村好洋君らが予定されている．午前午後1日のシンポジウムとして企画中．
9．第157回例会の開催経費として，基本補助金80,000円に加え，追加補助金120,000円の支出を認めた．
10．非会員の招待講演者大塚　攻氏の旅費・宿泊費として，62,560円の支出を認めた．

国際交流（真鍋）

1. 引継ぎを行った．
2. 日本古生物学会HPの新しい英語頁がIPAにリンクされるよう依頼した．

企画・広報（甲能）

1．引継ぎを済ませた．
2．HPで地球惑星科学連合のニュースレターをリンクに追加した．
3．投稿マニュアルをpdfファイルとしてダウンロードできるようにした．
4. 日本古生物学会HPの評議員・常務委員名簿を更新した．
5. 学会規則・規定・内規を同HPに掲載した．
6. 学会HPの「古生物学について質問したい」コーナーの受け付け窓口を事務局のメールアドレスに変更した．FAQコーナーの新設も検討中．
7. 年会・例会の際のマスコミ対応の一環として，学会HPにマスコミ向けの宣伝や取材申請様式などをアップすることを検討している．

電子ジャーナル（真鍋）

1．ISI Thomsonにこれまで3号分を送付したが，まだ採用の可否について連絡を受けていない．ISIは最低3号分を見て審査すると明記しているのでISIへの送付を継続する．
2．「Web投稿審査システムの検証パート3－より良いシステムを目指して－」（Sparc連続セミナー, 10月2日, 国立情報学研究所）に出席した．
3．Journal@rchive：雑誌のPDFファイルを収録するJournal@rchiveのプロジェクトに「化石」を申請したが，採択されなかった．
4．11月2日（金）に国立情報学研究所で開催された「メタデータPublishingの現在－電子ジャーナル主体の製作・出版に必要なもの」に出席した．
5．11月9日（金）に図書館総合展@パシフィコ横浜で開催された「日本の英文トップ電子ジャーナルの挑戦－SPARC Japanパートナー誌からの提案－」に出席した．
6．SPARC Japanロゴマークを当会HP等で表示するよう，SPARC Japanから依頼があった．
7．12月14日(金）に国立情報学研究所で開催された「SPARC Japanパートナー誌のコンソーシア購入に向けて－パートナー誌と大学図書館の合同会議－」に出席した．
8．現在PRのオープンアクセスはJ-stageにのみ依存しているが，J-stageに提供しているBIBデータは，BioOneが求めるXML形式とは全く互換性の無いものなので，現状のままでは電子出版のために二重の出費を強いられる．そこで，J-stageとの関係再検討を視野に入れつつ，学会独自のオープンアクセス提供サービスを検討する必要がある．

友の会（加瀬）

1．会員名簿の会員係への引き継ぎが完了した．
2．化石友の会会員から友の会に30万円の寄付の申し出があったが，通常の醵金の額の範囲を大きく逸脱しているので，辞退した．

その他

1．会長指名により下記の常務委員が任命された．友の会：加瀬友喜．自然史学会連合：甲能直樹．地球惑星科学連合：北里　洋．分類学会連合：佐々木猛智．
2．下記の幹事を選出した．庶務：鈴木雄太郎，中島　礼．会計：和仁良二．会員：田中源吾．行事：岩井雅夫, 村山雅史．欧文誌(副編集長)：佐々木猛智，佐藤たまき．化石：樽　創．特別号：重田康成．企画・広報：河潟俊吾．友の会：大花民子．
3．将来計画委員会は会長指名により下記の10名が任命された．遠藤一佳，大路樹生，柳沢幸夫，真鍋　真，生形貴男，本山　功，甲能直樹，佐々木猛智，北村晃寿，伊左治鎭司，鈴木雄太郎．
4．日本学生科学賞を受賞した故・宮内和也君（大阪府私立飛翔館高等学校）の受賞論文「モササウルスの食性を考える」を「化石」に掲載することとした．どのような形式で掲載するかにつ

いては，真鍋君と大路君が雛形を作る．
5．事務局職員の昇給と有給休暇の付与を大筋で了承した．
6．2008年6月9日(月)～13日(金)に国立科学博物館で開催される国際会議「第5回四肢動物の水生適応学会議」への本会の後援を了承した．会議では，同時通訳付きの公開講演会シンポジウムも企画されている．

会員の入退会（前田）

1．前回の評議員会議以降，入会27名（伊藤　毅，子安浩理，西城光洋，古見　浩，工藤路江，イングリス・マシュー・ポール，河部壮一郎，森下知晃，相原大介，加藤正明，米原俊生，岡庭信幸，川端弘子，三浦美佐，越智眞弓，川口　純，前田正雄，濱名徳明，大竹　望，大河原にい菜，望月　直，山下翔大，小守一男，中島保寿，芝原暁彦，田中嘉寛，長谷川　精)，退会15名（中沢克三，高安克己，佐藤　巧，杉村明弘，高岡善成，下中昌樹，黒木拓洋，川沢啓三，佐藤貴美子，大澤毅守，湯本道明，大口孝之，タウン・タイ，細川　努，ミュージアムパーク茨城県自然博物館），逝去1名(花井哲郎)で，2008年2月1日現在の会員数は1,100名である．
2．特別会員に推薦された19名の会員のうち，14名（三本健二，馬場健司，横井隆幸，斉藤　毅，奥田昌明，花方　聡，河潟俊吾，東條文治，佐野弘好，藤田和彦，鈴木雄太郎，田中源吾，坂倉範彦，田口公則）が会員資格変更を受諾した．
3．長谷川善和君，猪郷久義君，加藤　誠君，小畠郁生君の名誉会員への資格変更が2007年総会で承認された．

編集状況報告

欧文誌（大路）

1．12巻1号は7編の掲載を予定し，language editorに送付済み．12巻2号は6編の掲載を予定．12巻3号は2007年大阪年会シンポジウム「古生代および中生代における温室期の地球生物相」の特集号を予定している．それぞれ予定通り4月，6月，9月末に刊行見込み．2月1日現在受理済み論文16編，査読待ち論文3編，査読中5編，著者修正中8編，掲載拒否3編である．
2．現編集体制になってからの投稿は，Adminによる代理投稿が一部あったのを除くと全て電子投稿である．
3．現在受理済み論文数を多く抱えている上に，シンポジウム特集号も控えている．受理論文を早く印刷するために，1号あたりの掲載論文数を増やすことを検討している．

化石（西）

1．3月出版予定の83号は「古生物のアウトリーチ」シンポジウムの特集号で，大野照文，大木公彦両君に原稿を依頼中．
2．現在論説原稿9編，解説原稿4編を受け付けている．特集を予定していない84号にこの大半を掲載したい．
3．今後予定している特集は以下の通りである．85号：中～高緯度の両極性分布を持つ生物から見た地球（世話人：相田吉昭）．86号:2008年年会･総会（東北大学）シンポジウム特集（世話人:尾田太良・佐藤時幸・山崎　誠・井龍康文)．
4．学会主催ワークショップ「ザ．解剖学」の報告や，国際頭足類会議参加報告などの記事原稿を依頼している．

特別号（加瀬・西）

1．Saito et al.の復刻版CDに，約6万円の追加予算で「しおり」を付けた．2007年度内に支払い手続きを完了し，2008年度仙台年会・総会会場で販売する予定．
2．学会出版物バックナンバーの割引販売に関するお知らせを学会HPに掲載した．また，学会出版物申込書を事務局発送の会費請求書に同封する予定．

連合・学術会議報告

地球惑星科学連合（小笠原・北里；代理西）

11月6日（火）に東京大学理学部1号館で行われた第6回連合評議会に出席した．現在50の学協会が参画している．2008年末の法人化申請を目指しており，法人化後の連合の組織・運営形態について協議されているが，中でも，分野を5ないしは6に大別するセクション制の導入が検討されている．その中の「地球生命科学」セクションには，生命の起源，生物進化，古生物，生態系，極限生物，アストロバイオロジーなどのキーワードが並べられている．連合大会で「地球生命史」などのセッションに本会会員が積極的に参加するとともに，古生物学会（あるいは会員）が連合運営に積極的に参加することが重要である．2008年度連合大会の学会関連セッション「地球生命史」「化学合成生態系の進化をめぐって」の案内を，学会事務局から会員宛にメールで発信する予定．

学術会議（大路）

第3部地球惑星科学委員会

1．地球惑星科学委員会の地球惑星圏，地球人間圏，社会貢献各分科会による提言（以前の対外報告）作成が進行中．
2．国際対応分科会の小委員会であったIUGG，IUGS，IGU，INQUA（いずれもICSUに加盟）がそれぞれ分科会となった．IPAはIUGSのaffiliated associationであるため，岡田，北里両君は今後もIUGS分科会に参加してゆく．
3．第21期会員候補者の推薦が行われ，現在選考中である．地球惑星科学関係の会員は5名中、3名が改選される。古生物学会会員の平朝彦君は引き続き第21期も会員を務める。連携会員についても半数改選があり，学術会議会員・連携会員による第21期連携会員候補の推薦が行われる．古生物学会会員の連携会員のうち斉藤靖二君，岡田尚武君，北里　洋君が引き続き第21期にも参加する．
4．第20期･第3回地球惑星科学推進分科会（12/26）が開催された．古生物学会からは大路，岡田，北里，斉藤，平君が出席．第2部応用生物学委員会・基礎生物学委員会と第3部地球惑星科学委員会との共同管理である自然史・古生物学分科会を含む各分科会の報告や，今後開催予定の地球惑星科学シンポジウム，地球惑星科学合同大会などの概要報告などがあった．

第2部応用生物学委員会・基礎生物学委員会

1．第20期・第6回自然史・古生物分科会（10/17）が開催され，博物館法制度改正案にむけての現状が文部科学省社会教育課地域学習活動推進室長らによって報告された．改正博物館法では，大学博物館のみが文部科学省による管理下におかれ，その他の博物館は地方自治体の管理に一任する方向で調整中とのこと．今後の動向を見守る必要有り．
2．日本学術会議シンポジウム「生命の息吹と地球の鼓動を聞く～今,フィールドサイエンスが面白い～」が2007年11月25日(日)に日本未来館で開催された．
3．対外報告書「文化の核となるべき真の博物館の確立を目指して」が1月21日（月）付で学術会議から発表された．真鍋君が作成作業で中心的役割を果たした．

自然史学会連合（甲能）

1．2007年度連合総会(12/16(日))に参加した．現在38学会が加盟．
2．2008・2009年度代表選挙が行われ，西田治文君が再選された．
3．GBIFワークショップ21世紀の生物多様性研究の活動「生物多様性インフォマティクスを創出する2」（12/10：国立科学博物館分館にて開催）を後援した．
4．千葉県が開催した「三番瀬再生国際フォーラム」（1/29（火））を後援した．
5．連合講演会「いきもの・ひと・みずの自然史」を2007年11月25日（日）に琵琶湖博物館で開催した．参加者は115名だった．講演要旨やポスターの印刷費はロレックスインスティテュート社の助成金により賄われた．
6．2008年度の講演会は，11月に千葉県立中央博物館で開催予定．

分類学会連合（佐々木；代理小笠原）

連合の第7回総会が1月12日（土）国立科学博物館分館で開かれた．松井正文氏が新代表に就き，新役員が選出された．

将来計画委員会（小笠原）

2007・2008年度の将来計画委員として，遠藤一佳君，伊左治鎭司君，北村晃寿君，甲能直樹君，真鍋 真君，本山 功君，大路樹生君，佐々木猛智君，鈴木雄太郎君，生形貴男君，柳沢幸夫君の11名を指名した．

PR競争入札（小笠原・生形）

1．第3回常務委員会（10/27）において，PR科研費申請条件を満たすために競争入札を導入することとし，会長を委員長とする仕様策定委員会（生形，間嶋，大路，遠藤，柳沢，植村，真鍋）を立ち上げた．
2．11月17日（土）13:30より東京大学理学部1号館843室で第1回仕様策定委員会を開いた．PR 出版事業が現在置かれている状況の確認，組版と製版の方式の評価，相見積のための仕様策定と見積もり先の選定，競争入札の手順・スケジュールの検討などを行った．
3．入札公告，入札説明書，仕様書，契約書，開札実施報告書，入札書様式，委任状様式，競争参加資格確認申請書様式，出版実績様式を作成した．
4．予定価格設定のための相見積もりを，学術図書，小宮山印刷工業，レタープレスの3社から取った．
5．第四回常務委員会（12/15）において，以下の点を確認した．1）入札対象を来年度出版分のみとする．2）仕様書記載の印刷形態は従来式のフィルム製版方式とする．3）J-stage 提供用BIBデータを仕様書から外す．4）技術審査資料として，数頁相当の見本刷とXMLデータを提出してもらう．XMLデータの評価はデジタルコミュニケーションズ社に依頼した．
6．会長が評議員にメールで中間報告（12/17）．
7．学会HP に入札公告をアップした（12/28）
8．1月24日（木）16:00に入札書の受領を締め切った．3社が応札した．
9．1月26日（土）13:00より東京大学理学部1号館843室で第2回仕様策定委員会を開いた．競争参加資格の確認と印刷品位・レイアウトの評価を行った．
10．技術審査結果通知を応札各社に通知した．
11．2月4日（月）14:00より事務局で開札予定．参加業者に開札実績報告書を提出し，落札業者と2月11日（月）まで契約書を取り交わす．

その他

1．新潟大学理学部と琉球大学熱帯生物圏研究センター瀬底実験所とが共同で研究会を開催する予定（世話人：松岡　篤）．

審議事項

第158回例会開催地の決定

第158回例会を，2009年1月30日(金)～2月1日(日)に沖縄県那覇市において琉球大学と沖縄県立博物館の共催で開催することとした．シンポジウムとして「琉球列島の固有生物相の起源と成立プロセス」を計画している．

2008年年会のシンポジウム案について

2008年年会におけるシンポジウム案「環境指標としての後期新生代微古生物学と古海洋学の進展」（世話人：尾田太良・佐藤時幸・山崎　誠・井龍康文）を承認した．内容の詳細については世話人と常務委員会等で検討を進める．

ポスター賞選考委員の選出

第157回例会のポスター賞選考委員に長谷川君(委員長)，甲能君，安藤君，西君，生形君を選出した．

電子ジャーナルの公開の仕方について

Paleontological Researchの電子ジャーナルは，現在国内向けと海外向けとでそれぞれJ-StageおよびBioOneで公開されているが，それぞれの採用メタデータ形式が異なるため，電子化に二重の費用がかかっている．将来性のあるBioOneへの一本化が望ましいが，その場合，国内の図書館の購読契約数が少ないために，古生物学会会員がアクセスできなくなるという問題が生じる．そこで，古生物学会HPにIDとパスワードによる認証機能を付加し，会員が学会HP経由でBioOneの電子ファイルを閲覧する方式を採ることとした．認証システムについては，導入と運用にそれぞれ費用がかかるが，BioOneへの一本化を推奨するUniBio Pressが導入費用の負担を予定している．導入後，当会HP上の認証機能の運用経費としてかかる年間約9万円の支出を認めた．

化石特集号ページチャージについて

これまで著者や世話人に負担を求めてきた特集号のページチャージについて，編集長が年間予算との兼ね合いを裁量し，出来る限り著者負担を軽くすることとした．ただし予算額を上回る場合には，常務委員会に諮ることとする．

その他

間嶋君より学会賞の選考について発議があり，これを受けて会長が選考委員会の立ち上げを提案，承認された．選考委員会は，小笠原会長を委員長として，平野君，棚部君，北里君，間嶋君と会長が後日提案する1名で構成することとした．

各賞贈呈文および受賞ポスター

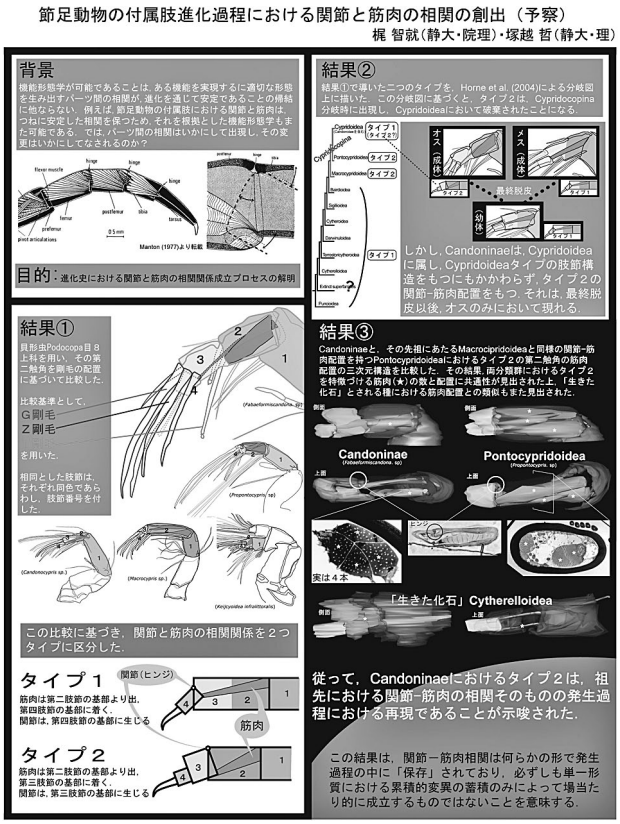
第157回例会（2008年度2月宇都宮大学）優秀ポスター賞

梶智就君・塚越哲君
節足動物の付属肢進化過程における関節と筋肉の相関の創出

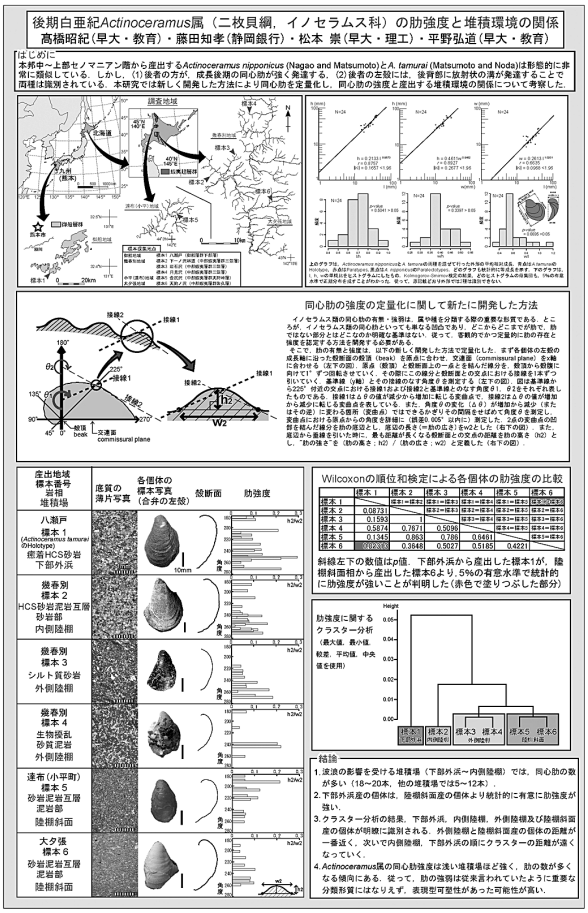
高橋昭紀君・藤田知孝君・松本崇君・平野弘道君
後期白亜紀*Actinoceramus*属（二枚貝綱，イノセラムス科）の肋強度と堆積環境の関係

中島保寿君
骨組織が示唆する原始的魚竜類の成長

ポスター受賞者
左から中島保寿君，高橋昭紀君，小笠原憲四郎会長，梶　智就君



梶智就君ほかのポスター



高橋昭紀君ほかのポスター

梶君のポスター

編集委員会より

本号は2007年2月の日本古生物学会第156回例会（徳島県立博物館）で開催されたシンポジウム「古生物のアウトリーチ　―博物館での取り組みを例にして―」の特集号として出版しました．アウトリーチは，博物館に限らず大学や研究所に取っても重要なテーマなので，会員の皆様にシンポジウムの内容を紹介すべきとも考え，講演要旨と重複する部分はありますが，特集号として掲載させていただきました．それと同時に，京都大学と鹿児島大学における大学博物館の取り組みを，アウトリーチの実践の例として２つの論説にて紹介していただきました．あわせてご覧下さい．

（西　弘嗣）